



Title	探勝會の記
Author(s)	白井, 文溪; 桑原, 直子; 仲田, 應弘
Citation	懐徳. 1933, 11, p. 117-126
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88900
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

探勝會の記

芳山の一夜

白井文溪

七月一日日くれ前懷徳堂々友會員同人と共に吉野ケーブルを下車、今夜の宿坊竹林院へいそぐ。

夏山や日の暮れせまり曇りくる

途上沛然として山雨來る、己むなくしばしの

雨宿りを路傍の家に乞ふ

夕立に坂のしぶきや山の町

俄雨晴れて急坂を登る、數町にして竹林院に入る、庭上老松槎枿として山あり池あり、林泉の風光また佳。くれの薄明りに怪鳥しきりに飛び交ふ梟也。

くつろぐや雨後のしめりに茂る宿

三方開け放つた大座敷の中程に二張の大櫛を

芳山の一夜

つるして寝る、寢床の變りたる風もなく寝つかれず。月出づ更けゆくまゝ、かごは大峰登山行者の鈴の音が續く。

短夜やまた水音を池の鯉

短夜や梟の聲を夢かとも

明くれば二日早朝より夏山めぐり、阪路の傍、吉野朝時代後醍醐帝を奉迎せし吉水宗信法印の墓に參拜す。

夏艸をたゞ踏みかねて弔ひぬ

雲井櫻の朽木を左手に仰ぎ、子守神社へ賽す、豊臣秀頼の再建せるものなりと。

炎天を石楠花ひさぐ小店哉

一一七

ひる尙くらき蒼鬱たる杉の木立の間道を辿る。

木下闇深み人聲弍して

山の背に著莪の繁りや木下闇

如意輪寺に參詣、後醍醐帝陵を拜す、

手の汗や靜かに御陵伏し拜む

竹林院に戻りて晝食。少憩の後午後三時出發、

先づ後醍醐帝行宮吉水神社へ詣づ。

涼しさを花なき宮に思ひよす

弘川寺詣で

桑原直子

今年六月十一日、大阪史談會々員の弘川寺に詣

でらるゝ數に加りて、その朝八時阿倍野橋より

電車にのる、會員は二十人ばかりなり、富田林

にて下り、それより自働車を走らす。

藏王堂にて

夏山や御堂に登る下駄の音

歸途吉野ケーブル前より自働車に乗じ吉野神

宮に參詣、新らしき御社神々しさ限りなし。

日盛りや參道長き小砂利道

午後八時頃阿倍野驛着。バスにゆられて歸る。

大阪の町は灯りて門すゞみ

寺に着きて見れば、庫裡客殿新に建かわり、い

と廣やかに且つ其の清々しさいはん方なし、此

の寺は天智天皇の四年、役の小角草創し、天武

天皇の御代勅願寺となり、金堂講堂寶塔鐘樓な

ど建立せられしが、寛政二年兵火のため堂宇焼失せるなりと、今日は特に我等一行の爲にとて、後鳥羽天皇勅額、空海筆般若心經、西行法師消息、弘川寺縁起、正親町天皇宸筆、一乘院尊賞法親王書、似雲筆西行法師古墳記、同年並草、同阿彌陀像及硯など、數多き寶物を取出しかけならべおかるゝを、皆うちよりて見る、おのれは先づ古墳記を見て

たつね來てよむそ嬉しき幾歲か心にかけてし
ふる塚のふみ

昔のむす年ふる塚を尋ね來てみるもうれし
や水くきのあと

石山のくしき佛の御ちかひはひろ川寺にあ
らはれにけり

年並草は一部十冊にて二部あり、これは似雲法師が寶永七年より四十年の間の旅の記、和歌な

どにて、終焉の地なる和泉國鏝尾村の北村家に移られしのち、清書して寺に納められしものなりと、奥に書添へて「かきつめて見るもかひなし和歌の浦の年なみ草は藻くつはかりを」とあるにおのれ

くりかへし見るひまなきそ恨めしきかきつ
められし年なみ草を

また「とをひかた」と名づくる硯あり、その袋に「かきてまし硯の海のとをひかた甲斐なき瀉のもくつなりとも」とあるにおのれ

とほひかたかき残されしこの葉は和歌の
浦はの玉とかゝやく

寺證文といふもの見出づ、享保十五年十月西光庵とあり、これなん似雲法師の奥のおしまに行かれし時懷にせられしものなり、そのころの制度うかゞはれていとめづらし、

いまだ見をはらねども、ひるげせんとうながされければ、携へ行ける包ひらきぬ、住職の心づくしの餅甘しとて、皆舌つゝみをうつ、見渡す庭のさつきの花のさかりはやゝすぎたれども、いこうるはしさに、

弘川の青葉のかげの御佛になつの手向と匂

ふ丹つゝし

一同うちつれ立て、御墓へと石のきざはしのぼり行けば、右手の堂に薬師菩薩安置しあり、左手の空地に金堂再建の木標あり、その上の坂路數十歩のぼりしところ、西南見渡しよき平地に、西行法師の木像を安置せるさゝやかなる堂あり扉ひらき供物さゝけあり、住職より木像につきての物語りなどありて、一同ふしをがむ、此あたりや庵のありしならんかと思ひて、

西のそらなかめし昔おもふかなかたむく月の影を惜みて

それより新しく造られし坂をのぼりつゝ、百合の花を見て、

いさ折て手向まつらむわけのほる袂に匂ふ

山ゆりのはな

數百歩の上はひろくとして平らなる地なり、

いにし年生茂りつるうはらなども、今は皆きり

ひらかれて、見渡しいとよきところとなれり、

西行法師の墓は、西の方にやゝ高く、似雲法師

のは東の方にあり、世の名聞をすてゝ、かゝる

深山にこもりましかる兩法師の天かける靈や、

いかにおほすらむなど思ひつゝ伏をがむ、

嬉しくも世にあらはれつ茂りあふうはらか

きわけまうてし古塚

山を下り、座談の席にて住職は似雲法師に就て一場の講話あり、會員何某の君は、俳句にあらはれし西行といふ題にてをかしう話されしは、よき座興なりき、たのみ置ける車來つれば、ま

笠置及び

瓶原

は下午四時ごろなりき、
むすひわて嬉しさ袖にあまりけり心ふかめ
し弘川の水

仲田應弘

木津から中村先生の他に二三氏が加つた。九時十分、笠置驛を降りると、土産店が軒を連ねてゐ、美しい娘さんらの板についた客引は、懐古の情を亂して了ふ。

栗の花匂ふ傾斜の道には、瓦投の輪が所々に立てられて、スポーツと云ふよりも投機心を唆る。一回五錢である。

斯ふ好く晴れるんだつたら、洋傘を忘れた方

がよかつたと、新道から笠置寺の石段に掛つた時、つくづく思ふ。

寺の入口には、懷徳堂堂友會講演場と大書された墨の濃さが、汗あわた私等の元氣を甦生せしめる。

しばらく涼をとつて、中村先生の御案内で笠置名所を巡る。

彌勒石などを仰いで、虚空藏石の前に出る。虚

空藏菩薩の坐像の筋彫で、諭倉末期の作、弘法大師の作とは只傳説に過ぎない。京都大學では、此の拓本をさる爲、千二三百圓を掛け、顔だけでも大きな室にはいらぬさうだ。

此のあたり、社寺の巨大な礎石らしいものが有つて、昔時、盛んであつた山の様が想像せられる。

胎内潜りは、大岩が自然に重り合つたらしく、同行の少年達は、胎内の涼しさを云ふけれども、末梢的な好奇心は起らなくなつてゐた。

元弘元年九月二十七日、北條氏が笠置總攻撃の折、足助重範、僧本性坊などの強弓大力が味方の士氣を煽揚したが、夜半に至つて意外の足下から焼討の火の手が上つた。

悲憤遣る方なくおはした後醍醐天皇は、尊澄

法親王、藤原藤房、季房、源具行、千種忠顯等の腹臣を具して笠置落ちをされた。

さしてゆく笠置の山を出でしより天が下には隠れがもなし

いかにせむたのむ陰さてたちよればなほ袖ぬらす松の下つゆ

の唱和は、其の後に出來たものと傳へらる、難攻不落であつた笠置も、斯う一朝にして落ちたのは、麓の飛鳥路村の人が、抜け路を北條氏に教へた爲であつた。其の爲、飛鳥路村の人々は、裏切者として、現今もなほ、隣村から異端者視し、爪弾きされてゐるさうだ。

行在所趾と云つても、礎石も瓦の破片も見當らぬ處を見ると、假屋か、寺の一部かが置かれたものであらう。軍事上、此處へ行宮を置かれては、敵の目印となり易いので、下の寺あたり

が本當の行宮であつたらうか。

搖ぎ石の邊に出ると、木津川の清冽に沿うた青松の中に、笠置温泉の家々が白く光つて瞰下される。

中村先生は學生相撲の様にしきつて、五尺大の石を押してゐられると動く動く。私もあやかと動いたが、その功德よりも、掌の痛みの方がひどく長かつた。

岩間を攀ちつゝ、解脫鐘の前に歸つて來る。この鐘は宋風で、下が六つに切れてゐ、すばらしく日本ばなれのしたものだ。建久七年の銘があり、解脫上人の時に鑄造されたものと傳へられてゐる。

小憩後、中村先生から笠置山について、御講演が始められる。

此の山は、白鳳年間に開かれたもので、御影石

が累々として轉がつてゐる。巨岩の處々に突出した様は、登攀の難澁さを思はしめ、白鳳年間盛んだつた修驗道の道場として好適の地であつた平安朝にも有名だつたらしく、枕草子、百六十八段に、寺は靈阪、笠置、法輪。高野は弘法大師の御すみかなるが、あはれなるなり、石川、粉河、志賀、とある。

平安朝の末、安元二年に後白河法皇が臨御され、鎌倉の末には解脫上人が大伽藍を建てられ、笠置山の中興となつたのである。

永承七年から鬪争の世になり、釋迦の信が衰へて彌勒を信仰する者が救はれるといふ思想が熾んになつた。解脫上人も彌勒を信じたので、彼の巨大な彌勒石像が造られる様になつたのかも知れぬ。

後醍醐天皇が、南柯の夢を見られたのは此の

山であるが、こは一個の物語に過ぎず、歴史上何らの根據も無いことである。

太平記の處々に天狗の出て來るのは、正成が最新の宋風の學問をして、葛城、金剛、吉野の修驗道の人々と共に動いた故で、修驗者を天狗に見立てたのであらう。

太平記の著者は、南朝に好意を持つてゐ、楠公の戰略を誇張し、理想化して、神様のやうに書立てたのである。等々、二十分餘に渡つて、後醍醐帝を繞る御話をして下さつた。

書食後、汽車で加茂へ、一時十分だ。

婦人達のバラソルの日が反射してまばゆい。

先生達はタクシードで、私らは徒走で汗を拭き拭き、瓶原の内藤先生方へ、私は、道端の桑の實を食べては、丸い葉のより、葉の切れた方の

桑の實が酸味も多く、厭な匂ひのないのを賞美したり、桑の枝を拾ひ束ねてゐる朴訥な老爺に話しかけたりして山莊へ着いた。

庭の柔かい感觸の芝を踏んで、座敷へ通ると、お茶を吹き吹き戴いてゐる人や、一面に陳列された漢書に、恍惚としてゐられる人々だ。

椽先の篋を渡る風は、しばらくにして止んで、また元の蒸熱さだ。

拜月亭傳記の口繪は、珍しく確かな山水人物だ、南畫家の友に見せてやつたらと惜しまれる。

内藤先生は、質問に諄々とお教へ下さる。

床脇に支那の床が置かれ、其の臺は、支那の古墳から出た波紋のある瓦焼の柱で、支那の墓は人家の様に作られてゐた様が解るのである。

二千年前のものやさうだ。

内藤先生は、解脱上人について五十分ばかり御話下さる、椽先で、お世辭のうまい山本権信

氏のカメラに入られた。時に二時四十分である。

海住山寺へは凸凹路を四十五分餘も登つたので一同は黄色い息を吐いてゐる。石に腰掛けながら瓶の苔臭い水を分けられて汗を拭ふ。

住職が、國寶の五重塔を、心よく開扉して呉れた。

此の塔は鎌倉の初め、建保二年の創立で、當山の中興、解脱上人の追福の爲の由だ。普通の塔は心柱が初重まで來てゐるが、此の塔は、二重の處で止つてゐて、初重は、御厨子になつてゐる。中の唐草は、世尊寺の鐘の唐草と似てゐ、唐草の先が長くて、鎌倉時代の特長を發揮してゐる。

文珠堂は鎌倉末のものらしい。

下山する様になつて、吉田先生他、婦人達のおられぬに氣附く。途中から引返されたらしい。

御靈神社の朱い本殿を拜して、恭仁宮大極殿趾に至る。大極殿は後に國分寺に寄附されたものである。此處は五重塔の址らしく、組合せられたらしい礎石なり、布目瓦の焼けて赭くなつた破片が散らばつてゐる。参考品は、近くの小學校に藏されてゐるさうだ。

中村先生は恭仁宮について御説明下さる。

橘諸兄の勢力は、此の宮を支へるに至らなかつた爲、平城へ遷都となつて、國分寺に大極殿を寄附したのである。

内藤先生の書庫を、遙かに中村先生からをしへられながら、もと來た大橋にかゝる。

泉川の水は清らかに、鮎の水中に跳ねるのが

日に光る。川上からの風の涼しさに、汗が入つて了ふ。川端の木ささぎは白い花を盛上げてゐた。梓だと云ふ。泉川なり梓は、萬葉集には多く詠まれてゐて親しみ深いものである。

來し方を見放けては、瓶原、恭仁京を讃へた萬葉の影を浮べつゝ、加茂驛へ歩を進めた。

懷徳堂記事

▲記念祭典 昭和七年十月八日記念祭恒典を執行し、終つて京大總長理學博士新城新藏先生の『陰陽五行説と現代の科學』（本號所載）と題する記念講演あり。

▲清浦奎吾伯 十月二十六日伯爵清浦奎吾氏來堂出迎へる聽講生の請を容れ、講堂に於て修養に關する一場の訓話あり。

▲本山評議員 十二月三十日評議員本山彦一氏（大阪毎日新聞社長）逝去せらる。

▲林講師 十二月末日十三年間國文の講義を擔當されたる講師林森太郎氏辭任せらる。

▲高木評議員 同八年一月二十三日評議員高木利太氏逝去せらる。

▲大塚末雄氏 三月一日より元熱田中學校長、龍谷大學講師文學士大塚末雄氏に常任講師を囑託す。

▲阪倉篤太郎氏 四月一日より林講師の後任として第三高等學校教授文學士阪倉篤太郎氏に講師を囑託す。

▲成瀬文學博士 四月十四日より京大文學部教授文學博士成瀬清氏に文科講義講師を囑託す。

▲樋口評議員 八月二十二日評議員樋口三郎兵